OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	若者らしさの表出としての一人称への意味づけ : 集団に応じた意味づけの違い
Author(s)	大和田, 智文; 下斗米, 淳
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 89-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

若者らしさの表出としての一人称への意味づけ[1)]

—集団に応じた意味づけの違い—

大和田智文(専修大学人文科学研究所)
下斗米淳(専修大学文学部)

本研究では、若者における社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団への同一視の程度によって、若者らしさの表出に違いがみられるものであるのか検討した。その際、そのような集団における若者の一人称への意味づけを、若者らしさの表出の指標とした。専門学校生 91 名を対象に調査を実施した結果、当該集団への同一視の程度が、一人称への意味づけの中でも特に愛着を感じることに対して影響を及ぼしていることが確認された。本研究を通して、若者らしさを自分自身にとってより肯定的・是認的に捉えようとする傾向が、若者カテゴリへの同化やその後の社会的アイデンティティ確立のための源泉として機能している可能性が示唆された。

キーワード: 若者、若者らしさ、一人称、社会的カテゴリ、集団同一視

問題

いま、若者のさまざまな風変わりな振舞い方や態度、行動が社会的な関心事項として注目されている。たとえば大和田(2006, 2007)によると、現代の若者に特有とみられるような振舞い方や態度、行動(以下、“若者特有の行動”と記載)として、“ことば使いの悪さ”、“敬語使用不可、目上に対する非礼”、“若者ことば”、“流行に敏感・おしゃれ”、“地べた座り”、“すぐキレる”、“電車内での携帯等迷惑行為”、“大声で話す・騒ぐ”などが報告されている。

このような若者特有といわれるような行動を理解しようとするとき、大和田(2006, 2007)などは、こうした行動が生育環境や性格といった若者の個人的特性によって表出される場合ばかりではなく、いわば“若者”という社会的カテゴリ(すなわち“若者カテゴリ”)へと同化を進めていく上で表出される“若者らしさ”や、若者カテゴリの中におけるアイデンティティの確立・維持といった心理機制によって生み出されている可能性もあるのではないか、という視座(e.g., Hogg, 2006)より検討を行ってきた。

すなわち、この立場では、若者がいわば“非若者カテゴリ”では用いられることがないような彼らに独自な行動をとることにより、彼らの所属するカテゴリと他のカテゴリとの間にある差異性を最大化し、また同時に所属するカテゴリ成員間の差異性を最小化しながら彼らに特有のカテゴリを形成していくという過程(すなわち、若者カテゴリへの同化の過程)を想定していると考えられる。そして、さらに、異なったカテゴリ間の差異性を最大化することによる自己高揚を経験することで、若者は肯定的な社会的アイデンティティの確立へと方向づけられるのではないか、ということが予想される(Hogg, 2006; Hogg & Abrams, 1988, 1990; Turner, 1987)。

このような視座より検討を行った大和田(2006, 2007)においては、“ことば使いの悪さ”、“敬語使用不可、目上に対する非礼”、“若者ことば”、“大声で話す・騒ぐ”など、主にことばの使用(特に敬意を欠いたことばの使用)に関するものが若者特有の行動として数多く報告されていた。また、こうしたことばの使用に関する行動へのイメージと、“私的な価値観”や“性格・能力”など若者の持つアイデンティティの中でもより自己の中核に近いと考えられる側面との関連性も示されていた。さらに、上に示したような行動は、他の諸行動と比べ多くの若者にとって行動的により一致するものでもあった。このことより、対人場面における若者特有のことばの使用が、若者らしさの表出として彼らにとって重視されているのではないかと考えられる。人は、自分の所属するカテゴリと他のカテゴリとの間に差異性を確認することにより生じる自己高揚を経験することで、肯定的な社会的アイデンティティの確立へと方向づけられる(e.g., Hogg & Abrams, 1990)ことからも、上記のことが予想できる。そうであれば、ここで、若者の自分らしさ・若者らしさの端的な表現を見いだすために、若者の対人場面におけることばの使用のどのような側面に注目すべきかが問題となる。

この点に関し、たとえば Cooley(1902)は、“自分らしさ”すなわち自己とは、I、my、me、mine、myself といった一人称単数の代名詞によって示されるものであるとしている。また榎本(1998)によると、私、僕、俺など、日本語における一人称のさまざまな使い分けは単なることばの変化にはとどまらず、個人の位置する集団に応じた自己の変容をも意味するものであるという。

これらの報告を総合すると、若者が一人称をいかなる集団においていかに用いるか、またそうした一人称が若者個人においていかなる意味を持つものであるかを探ることが、若者らしさの表出が若者カテゴリへの同化や社会

的アイデンティティの確立へと向かう上でどのような機能を持つものであるのかを明らかにしていくために必要とされよう。

以上を踏まえ、大和田・下斗米(2006, 投稿中)は、個々の若者が用いる一人称への意味づけのことを機能的意味[2]として捉え、若者に特有と考えられる諸行動を理解していくための端緒として、個々の若者の位置する集団[3]に応じた一人称の使用の様相と、そこにみる各一人称にこめられた機能的意味を見いだしていくことを目的とした検討を行った。そこでは、一人称の使用の様相として8 個のパターンと、各パターンの特徴ある機能的意味が確認されていた。このことは、若者らしさの表出が、若者の若者カテゴリへの同化や、そうしたカテゴリにおいて社会的アイデンティティを確立していく上でいかなる機能を持つものであるのかを理解していくために一定の示唆を与える結果であったといえる。すなわちこの結果は、若者の自分自身の表象であると考えられる一人称に、若者が彼ら自身に関する自分らしさの積極的な意味づけを行っていることを示していた。したがって、このことから、若者が用いる一人称の中に彼ら自身のアイデンティティの一部を見いだすことができたと考えられる。しかしながら、ここでは機能的意味の各集団に応じた差異を、全てのパターンを通じて明確に示すことができたわけではなかった。よってここでの結果からは、若者カテゴリの下位概念となる各集団に、若者が自分自身を位置づけたことによる特有の反応であったか否かについては明らかになっていない。このため、一人称への意味づけの中に個人の位置する集団に依拠した反応があるのか、そのことを示す証拠を得ていくことも必要となってくる。

そこで本研究では、若者カテゴリの下位概念となる集団の違いによっても、若者らしさの表出としての一人称への意味づけに違いがみられるものであるのか、この点についての検討を行うこととする。ここで、個人の位置する集団に注目すると、ある個人にとって当該集団が問題となる側面には、大きく分けてその集団の質的な側面(すなわち、その集団がどのような集団(i.e., ゼミやバイト仲間)なのか)と量的な側面(i.e., ゼミやバイト仲間などの個人の位置する集団が、その個人にとってどの程度内在化されたものであるのか)とがあるように思われる。この分類についてはこれまでに詳細な検討が行われてはおらず、現時点では不明確な点が多いが、たとえば大石(2003)は、個人の位置するある集団が社会的アイデンティティの確立へと導くための基盤になりうるほどに重要なものであるためには、その個人の当該集団に対する同一視の程度がまず重要な要因になるとしている。本研究における問題意識の主要な部分は、若者らしさの表出が若者カテゴリへの同化や社会的アイデンティティの確立へと向かう上でどのような機能を持つものであるのかを明らかにしていくことにある。そうであれば、本研究においても上記のような個人の位置する集団の量的な側面(上記においては集団同一視)に注目をして検討を行っていくことが妥当であると考えられる。そこで本研究では、若者の位置する集団の量的な側面の中でも、大石(2003)の述べるような当該集団への同一視の程度を、若者の位置する集団の違いを判断するための指標として用いることとする。

一方、大和田・下斗米(2006, 投稿中)においては、一人称の機能的意味には大きく分けて以下のような 3 つの側面があると考えられている。それは、ある一人称に対して強いこだわりを持つなどの“一人称の大切さや愛着の程度に関する側面”、ある一人称を用いることが自己の表現としてもっともしっくりくるなどの“一人称への自己意識の現われに関する側面”、目上の人物などにある一人称を用いることに対し強い抵抗感を持つなどの“相手との関係性の上での当該一人称の捉え方に関する側面”である。そこで、本研究における一人称への意味づけについても、この 3 側面に基づいた量的な指標によって求めることとする。

以上より、本研究では若者に特有と考えられる諸行動を理解していくために、若者が用いる一人称を若者らしさの表出の指標として捉え、この一人称に若者の位置する集団に応じた意味づけの違いがあるものであるかを見いだしていくことを目的とする。その際、これまでの議論より、若者の位置する集団とは若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるようなものであることを必要する。上記の検討を通して、冒頭でも述べたような若者特有の行動が、若者カテゴリへの同化や社会的アイデンティティの確立のために具体的にどのような機能を持つものであるかについて示唆を得ていくこととする。

方法

調査対象

本研究においては、“若者”を社会的カテゴリの一つとして捉えることを前提とする。したがって、本研究における調査対象は、社会的カテゴリの一つである若者カテゴリを適切に代表するような対象である必要がある。たとえば、専門学校生や大学生などは、わが国における社会的階層からみてもここでいう若者カテゴリに分類することが可能であると考えられる。そこで本研究では、東京都内の専門学校生(介護福祉専攻２年次生)計 91 名を調査対象とし[4]、質問紙調査を実施することとした。質問紙は授業時間を利用して一斉に配布された。

質問紙構成

一人称の使用(選択)(質問 1-1) 日頃主に用いる一人称について、使用頻度順に 3 つまで記載を求めた。

一人称への意味づけ(質問 1-2) 質問 1-1 で挙がった最頻の一人称の大切さや愛着の程度(以下に記載の第 1 および第 2 項目に相当)、当該一人称への自己意識の現われ(第 4 および第 5 項目に相当)、相手との関係性の上での当該一人称の捉え方(第 3 および第 6 項目に相当)につき、独自に作成した質問項目を用いて質問をした(ここでは、これらの質問項目をもって一人称への意味づけを問うものであると想定した)。具体的な項目内容は、“その一人称を用いることは、あなたにとってどの程度重要であると思われますか？”、“あなたはその一人称に愛着を感じていますか？”、“あなたがその一人称を用いるとき、相手によっては他の一人称に替えた方がよいと感じることはありますか？(逆転項目)”、“あなたがその一人称を用いるとき、「まさしく自分らしいなあ」と実感しますか？”、“あなたはその一人称を、他の一人称をもって替えがたいものであると感じていますか？”、“あなたがその一人称を用いる時、ためらいを感じるようなことはありますか？(逆転項目)”の 6 項目からなり[5]、それぞれにつき、“1(全くそうでない)”～“7(とてもそうである)”の 7 段階で評定させた。

社会的アイデンティティ確立の基盤となりうる集団(質問 2-1) 学生生活を送る中で必要不可欠と想定されるような集団を 9 個提示し、最頻と回答のあった一人称を実際にはこのうちのどの集団において主に用いているかを尋ねた。具体的な項目内容は、“所属専門学校のメンバー”、“所属ボランティア団体のメンバー”、“所属サークル・所属県人会のメンバー”、“同じクラスや同じ授業のメンバー”、“遊びや食事などをともにする仲間”、“高校・中学時代からの仲間、地元の仲間”、“バイト先・実習先のメンバー”、“趣味の仲間”および“家族”であった。項目の収集については、大和田(2006, 2007)において社会的アイデンティティの探索的検討を目的に自己紹介文の記述を求めた際に得た資料や、今回新たに行った予備調査(2005 年 12 月実施)より得た資料をもとに行った。なお、この予備調査[6]は大学学部生(心理学専攻)11 名を対象に行ったものであるため、本調査実施に際し、提示項目の再検討がなされた。

集団同一視(質問 2-2) 質問 2-1 で回答のあった集団に対する同一視の程度について尋ねた。その際、Karasawa(1991)が作成した、個人のある特定の集団に対する同一視の程度を測る集団同一視(以下、“GI”と記載)尺度を用いた。具体的な項目内容は、“「あなたはその集団における典型的な人ですね」といわれたとしたら、私はその表現が自分に当てはまっていると考える。”、“「自分はこの集団の一員だなあ」と実感している。”、“「あなたはその集団における典型的な人ですね」といわると、よい気持ちがする。”、“私は自己紹介をするとき、その集団のメンバーであることを明らかにする。”、“私はその集団にとても愛着を感じている。”、“私の考えや行動に影響を与えた人が、その集団の中には数多くいると思う。”、“私の最も大切な友人たちは、その集団に数多くいると思う。”の 7 項目からなり、それぞれにつき、“1(全くあてはまらない)”～“7(とてもあてはまる)”の 7 段階で評定させた。なお、本研究における調査対象者が想定する集団は、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような性質を備えていることが必要と考えたが、本調査では予めそのような集団を想定させた上で一連の回答を求めてきてはいなかった。そこで、質問 2-1 で回答のあった集団に対する重要度について尋ねる項目を一つ追加で設け、この追加項目を、“社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団に対する GI 得点”を得るためのスクリーニング項目として用いた。具体的には、“その集団の一員であることは、私にとって重要なことである。”とし、上記と同様に 7 段階で評定させた。

統計学的特性 年齢、性別、所属、現在の居住地および出身地について尋ねた。

調査時期

2006 年 1 月下旬であった。

有効回答

調査対象者 91 名全員より回答を得たが、このうち回答の中に研究上の重大な欠損のあった 2 名を分析から除外したため、有効回答数は 89 名(男性 36 名、女性 53 名)となった。有効回答率は 97.8%であった。有効回答者の平均年齢は 21.34 歳(19～43 歳、SD = 3.67)であった。ただし、有効回答者のうちの 2 名については年齢が不詳であった。

結果

集団同一視と一人称への意味づけとの関連性

本研究では、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうる集団への同一視の程度が、若者の若者らしさの表出としての一人称への意味づけに影響を及ぼすものであるのかの検討を行い、集団同一視の程度と若者らしさの表出との間の関連性を明らかにしていくことを目的としていた。そこで以下においては、ある特定の集団に対する同一視の程度を測る GI 尺度によって得られた得点と、一人称への意味づけに関する各項目における得点との関連性についての検討結果を述べることとする。

本研究で用いた GI 尺度は本来 7 項目より構成されているが、質問 2-1 において回答者が想定した集団が若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうる性質を備えているものであることを確認する必要があったため、質問 2-1 で回答のあった集団に対する重要度について尋ねる項目を第 1 項目として追加の上で質問紙を構成して

いた。この追加項目は、“社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団に対する GI 得点”を得るためのスクリーニング項目として設けたため、同項目の得点が中央点に満たなかった(3 点以下であった)回答者 7 名分のデータを分析より除外することとした。さらに、学生生活を送る中で必要不可欠と想定されるような集団に関して記載のなかった 1 名と、GI 尺度および一人称への意味づけに関する質問項目への記載に欠損のあった 6 名についても分析より除外したため、回答者全体から合計で 14 分のデータを除外の上、計77名(男性32名、女性45名)を対象として分析を行うこととした。平均年齢は 21.43 歳(19～43 歳、 SD= 3.84)であった。ただし、ここでも 2 名については年齢が不詳であった。

GI 尺度における第 1 項目を除いた 7 項目と性別を説明変数、一人称への意味づけに関する各項目の得点を基準変数とする重回帰分析モデルを想定した。性別を説明変数と想定した理由は、日本語においては男女によって用いられる一人称が大きく異なっているため、両者における一人称の有する意味そのものが異なっているということが前提として考えられたためである。なお、各変数に関する基本統計量を Table 1 に、重回帰分析の結果を Table 2 にそれぞれ示した。

Table 1 各変数に関する基本統計量（n = 77）

指標	平均値	SD
集団同一視	32.21	6.17
一人称への意味づけ第 1 項目	3.86	1.41
一人称への意味づけ第 2 項目	3.73	1.65
一人称への意味づけ第 4 項目	3.65	1.52
一人称への意味づけ第 5 項目	3.32	1.43

一人称への意味づけに関する各項目の得点を独立の基準変数とした重回帰分析の結果をみると、第 2 項目(愛着の程度に関する項目)においてのみGIの標準偏回帰係数が有意であった(β = .29, p < .05)。すなわち、これはある集団への同一視の程度が高まるほど、一人称に対する愛着が高まるという関係性を示している。また、第 4 項目(自分らしさの程度に関する項目)においてはGIの標準偏回帰係数が有意傾向となった(β = .19, p < .10)が、重相関係数 R は .23(ns)と低い値であったため、解釈上注意を要するものと考えた。また、いずれの項目においても性別の有意な効果はみられなかった。

本研究では、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうる集団への同一視の程度が、若者の若者らしさの表出としての一人称への意味づけに影響を及ぼすものであるのかの検討を行い、集団同一視の程度と若者らしさの表出との間の関連性を明らかにすることを目的としていた。その結果、一人称への意味づけに関する第 2 項目(愛着の程度に関する項目)においてGIの効果が有意となった。そこで、上記結果に関しては以下において議論を行う。加えて、問題部でも述べたように、一人称への意味づけにみる若者の若者らしさの表出が、若者カテゴリへの同化や社会的アイデンティティの確立へと向かう上でどのような機能を持ちうるものであると示唆されるかについても論及することとする。

考察

本研究では、既述のように、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうる集団への同一視の程度が、若者の若者らしさの表出としての一人称への意味づけに影響を及ぼすものであるのかの検討を行い、集団同一視の程度と若者らしさの表出との間の関連性を明らかにすることを目的としていた。以下においては、本結果について議論を行う。

集団同一視と一人称への意味づけとの関連性

一人称への意味づけに関する各項目の得点を独立の基準変数とする重回帰分析を行ったところ、愛着の程度に対する GI の効果が有意となった。この結果からは、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような性質を備えている集団において、その集団に対する同一視を高く保っている個人ほど、彼らの用いる一人称に対する愛着もより強くなるという関係にあると解釈することができる。すなわち、この結果は、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団が、そ

Table 2 一人称への意味づけに関する各項目得点を基準変数とする重回帰分析結果（n = 77）

説明変数	一人称への意味づけ第 1 項目	一人称への意味づけ第 2 項目	一人称への意味づけ第 4 項目	一人称への意味づけ第 5 項目
性別	.10	.14	-.15	-.02
集団同一視	.14	.29*	.19+	.05
R	.18	.34*	.23	.05

表中の数値は標準偏回帰係数 β である。

+ p < .10　* p < .05

こに位置する若者にどれほど内在化されたものであるか、その程度によって、若者らしさの表出が質的に左右されることを示すものであるといえるであろう。当該集団に対する同一視の程度の高い個人ほど、自分自身を指す人称詞である一人称への愛着、すなわち自分自身への肯定的・是認的なイメージを有しているという両者の関連性から、集団同一視の程度が若者の若者らしさをより肯定的・是認的な表出へと方向づけていく可能性をみることができるからである。

さらに、当該集団に対する同一視の程度の高い個人ほど自分自身への肯定的・是認的なイメージを有しているという関係がみられたということは、若者の自分らしさ・若者らしさをより肯定的・是認的に捉える傾向が、上記のような集団の上位概念である若者カテゴリへの同化やその後の社会的アイデンティティ確立のための源泉となる可能性をも示唆していよう。なぜならば、若者が同一視の対象となるような集団において自分らしさを表出していくことは、当該集団独自の行動のさらなる表出を引き起こし、その結果当該集団の上位概念である“カテゴリ”の成員間における差異性の最小化がもたらされることになる。このように、上記のような集団に所属する若者が、いずれはその上位カテゴリの成員らしくなるという一連の過程(若者カテゴリへの同化の過程)を辿ることが考えられるからである。さらに、カテゴリ成員間の差異性の最小化と表裏関係にある現象として、異なったカテゴリ間の差異性の最大化を引き起こし、その結果自己高揚が経験されることで、最終的に若者を肯定的な社会的アイデンティティの確立へと導くことになるとの予想もされるからである(Hogg, 2006; Hogg & Abrams, 1988, 1990; Turner, 1987)。

本研究では、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうる集団への同一視の程度が、若者の若者らしさの表出としての一人称への意味づけに影響を及ぼすものであるのかの検討を行い、集団同一視の程度と若者らしさの表出との間の関連性についての明確化を試みた。その結果、上に示したように、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団において、その集団に対する同一視の程度が高い個人ほど一人称に対する愛着をより強く抱いているという様相が浮かび上がってきた。このことから、若者の社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団を、あたかも自分自身と一体であるかのように“自分自身の集団”として捉える傾向が、彼らの自分らしさ・若者らしさをより肯定的・是認的なものとして表出するように方向づけているのではないかと考えることができるであろう。なぜならば、当該集団に対する同一視の程度、すなわち当該集団を“自分自身の集団”として捉える傾向の強い個人ほど、自分自身を指す人称詞である一人称への愛着、すなわち自分自身への肯定的・是認的なイメージを有しているという両者の関連性が、本研究において確認されていたからである。さらに、このことから、若者らしさをより肯定的・是認的に表出しようとする傾向が、上記のような集団の上位概念である若者カテゴリへの同化やその後の社会的アイデンティティ確立のための源泉として機能している可能性も示唆された。

本研究においては、若者らしさの表出を、彼らが用いる一人称への意味づけを指標として捉えようとする試みを提案し、また、社会的アイデンティティ確立の基盤となりうるような集団への同一視の程度が、若者らしさの表出の質を左右することを示し、さらに、若者らしさの表出のあり方が、こうした集団の上位概念である若者カテゴリへの同化やその後の社会的アイデンティティ確立のための源泉となりうる可能性があることを示唆してきた。したがって本研究は、上記の点より、若者特有の行動全般における表出機制への理解を得るための基礎資料としても意味あるものであったと考える。

今後の課題と展開

本研究では若者の位置する集団の違いを量的側面(集団同一視)からのみ検討していたため、今後においては、個人が位置する集団の質的な違いにも注目していく必要があるだろう。そのような集団の質的違いによって個人の一人称への意味づけがどのように異なってくるのか、また、その意味づけの違いによって個人にもたらされるイメージも異なってくるものなのか、このような点に関しまず検討しておく必要があろう。次に、個人があるカテゴリへと同化していく過程が実際どのように進行し、若者の一人称への意味づけにみる若者らしさの表出は、若者カテゴリへの同化やその後の社会的アイデンティティ確立へと向かう上で具体的にどのような機能を持つものであるのか、またその同化過程において一人称への意味づけにみる個人の差異はどのように反映されるものであるのか、こうした点について検討を行っていくことが望まれる。

また、本研究においては“若者”を社会的カテゴリの一つとして捉えることを前提としていたため、その定義上若者に相当する年齢を厳密に想定することはしなかった。本研究における調査対象者は、社会的カテゴリの一つである若者カテゴリを適切に代表すると考えられる専門学校生であった。したがって、本研究における結果にはクロノロジカルな側面が反映されていないことになるため、たとえば生物学的な年齢区分といったものも想定した上で同様の調査を実施するなど、本結果における“若者らしさ”の説明力を増していくための工夫が必要となるかもしれない。

また本研究では、用いられる一人称の違いによる意味

づけの相違については検討されなかった。これは、単に一人称が変化をすることに伴う意味づけの変化を予め想定していたわけではなかったことによる。しかしながら、大和田・下斗米(2006, 投稿中)によると、各一人称における一般的なイメージに差異が確認されていることから、今後は一人称の違いを変数として扱っていくことも必要となるかも分からない。

さらに、本研究の結果において統計的に有意な効果が確認された点は、一人称への意味づけに関する第 2 項目におけるGIの効果のみであった(第4項目におけるGI の効果は有意傾向であった)。また、一人称への意味づけにおける相手との関係性の上での当該一人称の捉え方に関する側面については、詳細に検討することができなかった。これらの点に関しても、今後さらに調査対象を増やしたり理論の精緻化を試みるなど検討を重ねていく必要があろう。その上で、これまで述べたような一連の検討課題を通し、若者特有の行動全般における表出機制についての理解を深めていくことが今後に求められることとなるであろう。

引用文献

Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New Brunswick and London: Transaction Publishers.

榎本博明 (1998).「自己」の心理学 ―自分探しへの誘い― サイエンス社

Hogg, M. A. (2006). Self-conceptual uncertainty and the lure of belonging. In R. Brown & D. Capozza (Eds.), *Social identities*. Hove and New York: Psychology Press. pp. 33-49.

Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. (吉森 護・野村泰代(訳) (1995). 社会的アイデンティティ理論 北大路書房)

Hogg, M. A., & Abrams, D. (1990). Social motivation, self-esteem and social identity. In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.) *Social identity theory: Constructive and critical advances*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. pp. 28-47.

Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.

大石千歳 (2003). 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房

大和田智文 (2006). 若者観察者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 専修総合科学研究, 14, 201-228.

大和田智文 (2007). 若者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 文研論集, 49, 11-33.

大和田智文・下斗米淳 (2006). 若者における一人称への意味づけに関する検討(2) ―社会的アイデンティティの諸相にみる一人称詞の機能的意味について― 日本パーソナリティ心理学会第 15 回大会発表論文集, 52-53.

大和田智文・下斗米淳 (投稿中). 若者における一人称の使用の様相とその機能的意味 (未公刊).

Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Basil Blackwell.

註

1) 本研究は、日本心理学会第 70 回大会にて発表された。

2) ここでは一人称への意味づけが部分的であれ若者カテゴリへの同化を規定しうるものであると考え、この一人称への意味づけは個々の若者をそれぞれに異なった若者カテゴリへの同化へと方向づけていくための機能を有するものであると捉えていた。そこで、個々の若者が用いる、上記のような機能を有する一人称への意味づけのことを、ここでは機能的意味と定義していた。

3) ここでは“集団”を、社会的カテゴリの一つである若者カテゴリの下位概念として捉えている。具体的な集団は、後述の予備調査の結果より、“所属ゼミのメンバー”、“所属ボランティア団体のメンバー”、“所属サークル・県人会等のメンバー”、“同じクラスや同じ授業のメンバー”、“遊びや食事などをともにする仲間”、“高校・中学時代からの仲間、地元の仲間”、“バイト先・実習先のメンバー”、“趣味の仲間”および“家族”とした。なお、大和田・下斗米(2006, 投稿中)では、この“集団”を“社会的次元”と同義に用いていた。

4) 大和田(2006, 2007)によると、若者として想定される年齢層はおおよそ 10 歳代中盤から 20 歳代中盤くらいまでの広い範囲を含むものであった。それに従い、本研究ではそのちょうど中間層辺りと考えられる専門学校の 2 年次生を調査対象とすることとした。ただし、本研究では“専門学校生”という社会的カテゴリのみに注目したため、当該専門学校生の実年齢は考慮されていなかった。

5) 筆者はのちに一人称への意味づけに関する各項目の得点について項目分析(G-P 分析、I-T 相関分析、等質性の検討)を実施している。その結果、第1、第2、第4、第5項目に関しては、その適切性が確認されていた(第3、第6項目については、I-T 相関分析における相関係数と等質性の検討における α 係数がともに低いものであった)。そこで、本稿での一人称への意味づけに関する得点に関連する分析においては、第 1、第 2、第 4、第 5 項目のみを用いることとした。

6) この予備調査とは、学生生活を送る中で必要不可欠と想定されるような集団を自由記述にて尋ねるものであった。

Implication in first person pronouns as expression of youthfulness:

Difference of the implication to each social group

Tomofumi OWADA (*Institute of Humanities, Senshu University*)
Atsushi SHIMOTOMAI (*Faculty of Literature, Senshu University*)

This study was conducted to examine how the effect of group identification in the group that could be the base to construct social identity of young people influenced expressions of their youthfulness in such a group. On this occasion, the implication in the first person pronouns they used in such a group was put as the dimensions of expressions of their youthfulness. As a result of investigation for 91 vocational school students, the level of group identification had an influence on the level of implication, especially affection, in the first person pronouns they used. Thus, this finding suggested the possibility that the tendency of young people which apprehended their youthfulness as more positive and more approval trait functioned as the source for assimilation to their category and for later construction of their social identity.

Keywords: young people, youthfulness, first person pronouns, social categories, group identifications.